

昭和60年1月

図書館報附録

# 書 想

第 71 号

奈良教育大学附属図書館

## 哲学おんちの晩い目覚め

山本七平、論語の読み方 村上光博

新明解国語辞典（金田一京助編）によると、「哲学」

①人生の根本問題を専ら理性により突止めようとする学問、②自分自身の経験から築き上げた人生観・世界観 とある。人生を60余年もやって来ると細やかに②に該当するものは持っている積りであるが、これは何と云っても散文的で纏まりがなく、生々流転を続けている。この問題をしっかり体系づけて考え、確固たる人生観じんしんかんに到達する為には、①に当るもので修業し、他人様の人生観も伺って参考にすれば宜しいのでありましょう。敬愛する父（もの心ついてから今でも私はこの父の熱烈なファンでした）の自慢話 — 多分小学校時分の得意な課目の事でしたらう — のついでに「哲学は好かんかった」と云うのがありまして、それ以来哲学拒否の三つ児の魂が根付いて了いました。勿論昔の高等小学校しかやってない父ですから、高等小学の先生の不馴れな授業を受けた印象からだったに違いありません。「…哲学」と銘打った科目が登場するのは旧制高校や専門学校に進学してからの事ですが、小学校の通信簿に（高等小学校も併設でした）「哲学」と云う欄があったので、分かりもしないのに私の方から話題にした時の返辞であったのです。高等師範、大学と進学しましたが「…哲学」とある授業はズーッと避け続けて了いました代りには、倫理学と云う科目がありました。先の辞典を引く事をして居ればこんな事にはならなかったでしょうに…。

旧制中学に進学しますと初めて出会す課目として英語と共に「漢文」がありました。而も5年間、週2時間必修く同じウェイトの課目には教練、武道、

体育、国語、数学があり、英語は週7時間だったと思います）教科書の内容の教材は国語と畧同種のもので、随筆、歴史、伝記等の古今の名作の抜粋ですが、漢字の意味性質から自ずから読み方が定まり、漢字ばかりの文章を自由な読み方で読むのですが、どうしても文語調になり、如何にも格調高い響きがあり、国語の古文の舌を嚙むような読み方、又意味難解なのに比して遙かに好ましいものでした。歴史、伝記、紀行文等が大部分でしたが、数少ない随筆論文として論語、大学、孟子等の極々の抜粋がありました。

山本七平氏に依れば、文物伝来以来、この論語を中軸に所謂の四書、五経と呼ばれる中国古典が日本人の情操教育の柱を為して来たと申します。庶民階級に迄教育が普及して来た江戸時代以降は、この四書五経についての研究解釈（これが儒教と呼ばれる、信仰や宗教に匹敵する思想体系になった）を基にした考え方で牢固とした社会規範を形成して来て、明治開化、太平洋戦敗等で一時期の混乱は有っても、その都度、所謂「新教育論」、「新文明論」等が抬頭してその混乱を收拾して復興して居りますが、その「新…論」が大部分「論語」の読み直し、復活と解釈出来るのでした。

中学時代の漢文学習では、虎の巻（参考書）による予習は厳禁され、（辞書を引けと云う事）先生の解釈を金科玉條にする習性がつけられて了いました。数々の解説書を読み比べ、更に辞書から得た我流の解釈を先生に問う事こそが大事だったのですが…。論語、孟子の粹を並べたとしても、白文では誠に殺風景、解釈も字義通りの話ではなかなか感激と云う所迄行きません。当世の世情にはめて考えさせてこそ、我々の人生の智慧ともなるのでしょうか、左様な講義には遭わなかったと思います。更に挿絵に古色蒼然たる孔子、孟子の肖像を並べられると、古臭い昔の観念と位に片付けて了います。それでいて、「論語孟子はこんもの」とする不遜さは身につきました。

数年前、偶然の事で、岩波文庫本の菜根譚（今井宇三郎注）を覗き見し（真中辺を開いた。それでも読み進めます。論語も同様ですが、初から通読しないと読進めぬと云うものではありません。独立した

短かい章句が配列されているだけで順序は関係ない) 訳読の格調の良さ、解釈注の現代風で面白い事、思わず何10章句かを読み齧りました。無味乾燥に見える漢字の並びがこんなに面白い意味を表わしていたのか、と眼の鱗が落ちた思でした。漢文は、無理して読まなくても、先達に頼ればかくも楽しく読めるものか、と知った訳です。この菜根譚は中国の明代の書物ですが、正に論語の当世版と云うべき本です。そこで、山本七平氏の「論語の読み方」が出た時は飛びきました。菜根譚は洪自誠なる退職高官の所感集ですが、論語は何と云っても孔子とその一門、山本氏に依れば、孔子学園、或は孔子サロンでの師弟の研究紀要集でしょう。問答の形が多いですが、学園内で一緒に暮して居る間に、「先生、宣い事を云わはった」「お前さん、その考えはエライものだ」と云う風に含蓄深い、人間生活の知恵になる、元気付ける言葉だ、と云ったものが集められたと思われ

ます。  
「女子と小人は養ない難し」と、女性連中が面憎く見える時には、子曰く、のこの句で憤を遣っていましたが、これは君子に対する小人、女の君子(淑女、余り出て来ない語ですが)に対する小人の女と云う意味で、仁に近づこう(仁とは神や仏、或は悟りと云った所、人間の理想像なのでしょう)と努力しない非君子を指すのです。「民は之に由らしむ可し、之を知らしむ不可」、も民衆からは、その政治に対する信頼を勝ち得る事は出来るが、政治の内容を知らせる事は難かしい、と云う意味が通俗的に誤用されて、非民主的な政治を弾劾するのに使われているに過ぎないのです。話せばよく分かる理窟ではあっても、分ろうとしない人間も有るのです。分っても判断出来ない者も居る筈です。こんな時は、話して呉れる相手が信頼出来ると感じられたら、それに由りましょうし、嫌な手合いなら分ろうとしないだろうと思います。論語を粋の部分だけでなく、孔子の門人同志のやりとり、門人が屁理窟の様な反論、質問をした時の孔子の返辞、疍癩起した様な言葉は勿論文献として遣される事はなかったろうが、この返辞が如何にも大人らしい。而も巧く逆手の逆を取った様な話になっている事も、先達の助けを借りると読み取る事が出来ます。

「良い話(聞いて感激し、又誰かに聞かせてやりたくなる話)宜い考え方(発想と云うとスマートです)をもっと夙くから聞き知って居れば今とはずーっと異なった立派な自分が出来上って居たろうに」、と云う悔恨は、人生の午後にかゝって来たからこそ発想かも知れません。論語の読直しの中に私は、私の遅れた哲学を追認定して貰いにかゝっている気がします。生れ更って、も一度人生がやれるのなら、出来るだけ早く論語を読んで、何の仕事をするにしても、その時々々の知恵を捻り出そうと思います。その時は山本七平氏のこの本も、論語解釈の注釈書の一つに納まり、又誰かの当世風注釈書が出ている事でしょう。

## 貴重文献紹介のあり方について

森 本 修

昨年四月から、私は奈良周辺在住の近代文学研究者数人と、月に一回、天理図書館に所蔵されている近代文学関係の肉筆類をみせてもらっている。昨年七月、芥川龍之介の「杜子春」「大導寺信輔の半生」「アグニの神」の自筆原稿と書簡とをみせてもらった時、岡山大学の赤羽学教授が「杜子春」自筆原稿の複製申込みをされた、ということを知った。私は、その研究成果が発表されるのを心待ちしていたところ、去る10月3日付の『読売新聞』(大阪本社)朝刊19面<近畿版>に、「芥川龍之介の<杜子春>自筆原稿見つかる 赤羽教授(岡山大)が天理図書館で」という見出しで、赤羽教授がこのほど芥川龍之介「杜子春」の自筆原稿を天理図書館で見つけて、『岡山大学文学部紀要』第4号・通巻第44号(昭58・12・25)に<紹介文>を寄せた、「杜子春」の自筆原稿の所在が明らかになったのは初めて、という記事が掲載された。この記事は、関西の近代文学研究者の間では一寸した話題をよんだが、この記事と記事のもととなっている赤羽教授の<紹介文>—「芥川龍之介の『杜子春』の自筆原稿の紹介」には、事実と違っているところがいくつかある。

まず、赤羽教授の<紹介文>には、「私は、永らく『杜子春』の自筆原稿の出現に意を留めていたが、

この度これが天理図書館に所蔵されていることを知り、その紹介を許されたのでここに発表する。(中略)この貴重な芥川の自筆原稿が果して世に紹介されたことがあるか、寡分にして私はその事実を知らない。(中略)芥川の『杜子春』の自筆原稿の所在に触れた方がおありならば、御一報願いたい。」とある。これが『読売新聞』では、「機会あるごとに、あちこちの図書館で目録カードをくっていた」赤羽教授が、芥川「杜子春」の自筆原稿を「一昨年、ついに天理図書館で見つけた」、「この自筆原稿の所在が明らかになったのは初めて」となっている。

では、実際はどうであろうか。天国図書館では所蔵の文献を独占せず、広く公共の利用に供しており、貴重な文献は『天理図書館稀書目録』に掲載してその所蔵を明らかにし、『善本叢書』として刊行したり、『善本写真集』『ピブリア』などにも掲載し、定期的に展覧もしているのは周知のことである。また、天理図書館の貴重文献については、最近では小田切進『続文庫へのみち』(東京新聞出版局 昭56・12)にも詳しく紹介されている。「杜子春」の自筆原稿については、「昭和廿八年十月吉日」に天理図書館に受入れられた後、『天理図書館稀書目録 和漢書之部第三』(天理図書館 昭35・10・18)の四五七ページに、目録通し番号二九五七「杜子春 写一冊 芥川龍之介著 自筆ペン書 袋綴 改装後 補牡丹唐草模様裏葉色綴子表紙 用紙裏打 二八糎 一九糎 原寸二五糎 十行二十字詰『松屋製』原稿用紙 二十七丁 題簽左肩金砂子散『(書名同)芥川龍之介作』(赤い鳥大正九年七月号原稿 九一三七―イ三五)」と記載して、その所蔵を明らかにしている。また、昭和43年10月1日から44年1月31日まで、天理ギャラリー(東京天理教館)で催された「天理ギャラリー第二十二回展 近代文豪の原稿」でも展覧されており、同展図録(天理ギャラリー 昭43・9・26)には、自筆原稿の巻頭部分に掲載され「39 杜子春 芥川竜之介 大正9年7月雑誌赤い鳥に発表の中国もの童話。後『夜来の花』、『沙羅の花』ほか『三つの宝』等に収載された。鄭還古撰の『杜子春伝』に依ったものという。大導寺信輔と同じく松屋製200字詰原稿紙にペン書、数次の推敲を加えている。」という解説が付されている。こ

のように、「杜子春」の自筆原稿が天理図書館に所蔵されていることは、早くから明らかにされていたのである。

次に、赤羽教授は「芥川龍之介の『杜子春』は、大正九年七月一日の雑誌『赤い鳥』五巻一号に掲載された。それは、七年五月一日の同誌創刊号に載った『蜘蛛の糸』に続く、彼の童話の第二作である。」(傍点・森本)としているが、正しくは「蜘蛛の糸(大7・7・1)、「犬と笛」(大8・1・1、15)「魔術」(大9・1・1)〈いずれも『赤い鳥』に掲載〉に続く芥川の童話第四作であり、「杜子春」自筆原稿は、「縦三十三センチ、横二十二センチの袋綴の冊子に仕立てられ、(中略)紙数は二十六枚、(中略)函架番号は『九一三七―三五』としているが、自筆原稿の寸法と丁数、函架番号が間違っていることは、前掲の『稀書目録』の記載と比べてみれば明らかである。

また、赤羽教授は「杜子春」自筆原稿がく世に紹介されることがない例証として、「昭和五十二年七月の日本近代文学館における『芥川龍之介<sup>没後五十年</sup>展』、及同五十六年六月の東京神田の三省堂における『芥川龍之介資料展』にも出陳された形跡はない。」ことをあげているが、「芥川龍之介<sup>没後五十年</sup>展」は同展図録(日本近代文学館 昭52・7・1)に記されているように、日本近代文学館収蔵資料によって、「芥川龍之介資料展」は三茶書房・岩森亀一のコレクションによって構成されたもので、天理図書館所蔵のものが出陳される筈がない。そして、「ひよっとすると天理図書館独自の資料展に出されたことがあるかもしれないが、それを知る手立はない。」といているが、前記の小田切進『続文庫へのみち』にも「芥川の『杜子春』五十四枚(中略)『赤い鳥』創刊号に載った『杜子春』原稿の指定は鈴木三重吉の手と思われる。」という記述のあとに「近代文豪の原稿」展についてふれられている。「杜子春」自筆原稿の展覧については、赤羽教授が天理図書館に自筆原稿の複製を申込んだ際に尋ねればわかったことである。

更に、赤羽教授は「『杜子春』の場合、『蜘蛛の糸』の時のように、編者の訂正はなかった。」と述べているが、赤羽教授が芥川の推敲としてあげてい

るうちの四カ所は、管見によれば組版指定と同じ赤インキで、芥川とは違う手で直されており、芥川の推敲ではなく『赤い鳥』編集者の手によるものとみられる。

今回の『読売新聞』の記事と、赤羽教授の〈紹介文〉を読んで、貴重な文献を紹介するにあたっては、慎重の上にも慎重でなければならないと、改めて私自身の戒めとした。(1984・12・8)

## 落穂拾い

宮下 福太郎

私とほぼ同年配の人にとって忘れ得ないフランス映画の一つに「舞踏会の手帖」(1937年)がある。マリー・ベルというフランス美人を代表するような女優が扮するクリスティーナが訪れた男たちは、彼女の青春のページにどんな思い出を加えたか。今は記憶が薄れたが回想を織りまぜて物語を展開していく。

しかしこの雑文は映画史を語るのが本意でない。「舞踏会の手帖」を引き合いに出したのは、回想形式を借りて本のあれこれに触れようとするもので、云わば落穂を拾いながらのモノローグである。

谷崎潤一郎氏の「春琴抄」に心を動かされたのは少年期から青年期への過渡期であった。少女時代に失明した美しい女性琴と彼女につかえる手代佐助の純愛物語はその頃の私には崇高にさへ映った。中学時代(旧制)は随分岩波文庫のお世話になったが、「若きヴェルテルの悩み」(ゲーテ)や「狭き門」(ジイド)の強烈な印象があせぬ間に日本の作家による「春琴抄」にめぐりあえたのは幸運であった。近頃、谷崎夫人松子氏が高雄山にこもって「春琴抄」に没頭していた谷崎氏に、「夕霞棚引く頃は佐保姫の姿をかりて訪はましものを」の恋歌を贈ったことを知った。谷崎さんはしあわせな人だと思う。

「春琴抄」と同じように残り火が消えぬ間に読み返したい本に「蜻蛉日記」(藤原道綱母)がある。あまりにも有名なこの古典はモーパッサンの「女の一生」を連想させるが、日記文学と小説の違いはあ

れ、洋の東西を問わず女性の生き方を考えさせる著書である。

不思議なことに、ソーニヤ・コヴァレフスカヤという名前が脳裡に留まっているのは、彼女の自伝と追想が私を強く捉えたからであろう。同じ頃読んだ「零の発見」は多くの知識を授けてくれたし、「北越雪譜」(鈴木牧之)は雪国とは程遠い大阪で生まれ育った私を驚嘆させるとともに感動させた。また野村長一氏の「楽聖物語」はレコードを購入する時や音楽を聴く場合の指針であったが、もっと大切なことは音楽の知識を増殖してくれたことである。これらは読書の効用の一例である。

少し馬令を重ねて「善の研究」(西田幾多郎氏)、「三太郎の日記」(阿部次郎氏)、「愛と認識との出発」(倉田百三氏)などの著作に出合うことになる。当時これらの著作は必修科目めいた信仰があったが、学力不足の私などは誤った読み方をしていたのではなからうか。「三太郎の日記」は終戦間もなく再読の機会を得たが、近頃また読み直したいと思っている。

そういえば読み返してみたい本があればこれも名乗り出てくるようで気ぜわしいが、そんな気ぜわしさと関係なく時折頁を開く本がある。「宮沢賢治名作選」(羽田書店、昭和14年)である。子供達が幼なかった頃「風の又三郎」を読んで聞かせた。子供達は聞きたし怖しで、いつの間にか寝入ったものである。稀にやってくる孫たちにも読んで聞かせるが、今年小学校へ入学した孫には通じなかった。「本当は風の又三郎っていないんでしょ。高田三郎君でしょ。」この孫は知らない漢字を聞き聞き何日もかかって「風の又三郎」を読み終えた。そしてその中の気に入った方言をつかいはじめた。

## ヘルマン・ヘッカー先生のこと

千成 俊夫

ヘルマン・ヘッカー氏(元北大教師)札幌市の自宅で肺気しゅのため死去。85才。ドイツ・エルザス

州バイセンブルク町出身、ストラスブルク大、キール大、バーゼル大、ハイデルベルク大をそれぞれ卒業後、大正13年から2年間、駐日ドイツ大使の家庭教師として滞日。昭和5年北大予科のドイツ語教師として再び来日、いらい同大でドイツ語ドイツ文学を講ずるとともに日独親善にも大きな足跡を残した。

(北海道新聞)

筆者の部屋に葉書大の彩色石版画が掛けてある。裏を返すと日付けは昭和24年2月7日になっていて、差し出し人はヘッカー先生である。文面は、私の故郷ドイツに興味を持ってくれて有難とう。この絵葉書は港町ブレーメンの古いしかし絵のように美しい家です。葉書のドイツ語がわかってくれば嬉しいといった内容である。先生の筆跡は美しく、それは驚ペンでの書体を思わせる。しかし当時から30数年経った今日、インクはセピアに変色し台紙の中に消えかかっている。

筆者が先生からドイツ語とフランス語を習ったのは昭和23年から28年までのことである。先生は北大の予科で教えられていたが、週一度学芸大学やその前身の師範学校にも来ておられた。先生が筆者に教えられたことを当時のメモから転記しておきたい。

H老先生 見てごらんなさい Mein Liber  
あの針のように光った梢の向こうにある薔薇色の雲と青空、春の兆しです。確かに気温はかなり降っております。でも風がない。Frischです。こんな日はよくアルザスを思い出します。もう幾十年も前、故郷の山でそり遊びをしました。やはり今日のように空が美しかった。子どもの頃、なんと豊かなことでしょう。幼年時代の憧憬はもう二度ともどっては来ない。私はMärchenが好きです。非常に多くの人生経験や美を内包している童話を愛することが、Kindischだなどとは思いません。しかしグリムには、あまりにも悲惨で子どもに読ませたくないと思われるものがありますね。暗く悲しく和解し難いもの特に戦争は私の心を痛めます。君はトーマスマンのマリオと魔術師を読みましたか。催眠術師のチポルラが、どんなふうに善きもの美しいものを踏みじり、恐怖と非条理をもたらしたか、恐ろしいことです。御承知のようにマンは故郷を追われ一切

を剥奪されました。アンドレ・ジッドが亡くなりましたね。彼もそうでした。生涯を世界の良心のために戦いました。君がチャド湖より帰るを読むとそのことが判るでしょう。Selbstlosmenschenliebeが今日どんなに不足していたことでしょう。ワーグナーは彼の作品にこの精神を貫きました。今日した話し、さまよえるオランダ人のゼンタ、ニュールンベルグの名歌手ではハンス・ザックス、トリスタンとイゾルデ、ローエン格林、タンホイザーのヴォルフラム・エッシェンバッハとかわいそうなエリザベトのことを考えてみましょう。Mein Lieber、音楽はこよなくよいものです。唯一にして無二の世界語なのです。たとえば言葉が通じなくても、私は君の弾くベートーベンを聞いて君を理解できるでしょう。だからその習得に決して勇気や辛抱を失ってはなりません。君が音楽を愛しているならばこんな諺があります。“ものごとに対する愛着やあこがれは、骨折と労苦を弱める”。そして音楽は、辛抱を越えた価値を持つのです。おや電車が来たようですね。そうですか、あの方が君の師ですか。それでは行って挨拶しなければなりません。何故って— 芸術家は尊敬されねばならないからです。芸術家は奉仕する人です。自分の生命をそのことに注ぎこんでいる人だからです。今日はよい日でした。美しい大気が私を故郷に運んでくれました。Aufwiedersehen!

昭和28年学芸大学を卒業した筆者は中学校の音楽教師として赴任した。旧制の中学から進学して来た筆者は音楽といっても文字通りピアノのピの字も弾けなかった。しかし入学してからの練習によって曲りなりに音楽科の免許を取ることができた。それはヘッカー先生が植え付けた音楽へのあこがれが、18才を過ぎて初めてピアノに触れた若者に対しその練習の苦痛を克服させたわけであった。

先生が亡くなったのは昭和42年4月20日のことである。その年の3月筆者は北大教育学部大学院教育方法講座の入試に合格した。十幾年間か現場の教師をやって来て壁にぶつかり、もっと根本的なものを知る必要に迫られての進路の変更であった。試験に当っては昔先生から教えを受けたドイツ語があづかって大きな力となった。しかし先生にそのことを報

告しに行くことはもうできなかった。先生は無類の煙草好きであった。持病の肺気腫のため喫煙を禁止されていた先生は、煙草を一本所望され満足そうに吸ってから息を引き取られたという。

先生の葬儀の日は午後からの雨が曇になった。広い教会堂の中で寒さに震えながらわれわれは、生前先生が愛唱されていたマタイ受難曲の“血しおしたる主のみかしら”で始まるコラールを歌った。葬儀が終り先生に別れを告げて外に出ると、舗道は雪で覆われており、雲の切れ目に月影が見えかくれていた。筆者にとって先生は本以上のものなのである。

## レオニード・クロイツァー 先生の思い出

藤村 るり子

毎年、待降節のころになると、ほのぼのと何とも云えぬ静かなよるこびが心の中にひろがってきます。この様なよるこびを身内に感じながら私はクリスマス・ツリーをセットし、かわいい飾り物をつるし、プレセヴィオの人形をピアノの上にひとつづつとり出して、二千有余年前の主の御降誕のよるこびを深く味わいます。

“わたしは静かに神を待つ  
わたしの救いは神からくる”

(詩編より)

神との出会いは私の在り方ありかたを変えていった、リストによって私が在る、といえる様になってしまったのです。そして私の様に、ピアノと共に生きてきた人間には、知らない間に、宗教と音楽の世界の融合の中に在ったことに今更乍ら深い感動をおぼえます。

人生は、人との出会いによって人格を形成されてゆくと云えるかもしれません。その意味で恩師レオニード・クロイツァー先生との出会いは今も大きな影響を私に残しています。当時、私はまだ若く、葉山に住んで居り、二週間に一度先生の住んでいられた目黒(五反田)の家にレッスンに行きました。友人の家に一泊するために楽譜以外に、たくさんの荷物を持ち、ときには捨てられていた仔猫を連れて行ったこともあります。

先生はいつも必ず玄関に迎えに来られ暖かい大きな手で握手をして下さいました。背丈はむしろ小柄

でいらっしやっただのに内部からおし出されてくる力(威厳)ともいうべき大きさが私に迫ってくる(勿論、暖か味と共に)ものがありました。

私は、その度に私自身の小さく(すべてにおいて)を痛感し、リストの前にたつクララ・シューマンの云葉を思い出したものです。(この場合は演奏に関してのことの様ですが)。“彼の演奏をきく度に私は自分自身、まるで少女の様に感じられます。”

私は先生に会う度に自分は、こんなにちっぽけなのか、何故だろう?今思えばそれは内部的なものの包含のちがいであったと思うのです。しかし、とにかく先生は暖かく、可愛がって下さった。タッチの根本的な問題を、第一回目のレッスンで徹底的に教えて下さった。レガートの方法を変えての種々の練習法、十本の指のもつ各々の使命、ペダルのいくつもの使いわけ等々回数にすれば十回位のレッスンであったのに(私は先生の最晩年の生徒であったといえるでしょう)、そのひとつひとつが私の音楽表現上の血となり肉となっていたのです。先生に教えて頂いた最後の曲が、ベートーヴェンの「告别ソナタ」であったことは何か意味があったのかもしれない。

先生が一番始めにおっしゃった言葉、「さあ、一緒に勉強をしよう、二人のための勉強だから、人間は教えるべきでなく与えるべきである」と、またこうもおっしゃいました。「お前も生徒だが、私も生徒である、人間は死ぬまで真実を求めて学ぶものである」と。先生は一度も謝礼金をおうけとりにならなかった。「そんなことを心配するよりもお前の音楽をとおして私をよろこばせてくれる方がどれだけ私にとってうれしいことか」ともおっしゃいました。先生の先生はエジッポフ夫人(たくさんの偉大なピアニストを生み出したレジュティッキー氏の夫人であり弟子でもあった。レジュティッキー氏のことは、パデレフスキー自伝に非常にたくさん書かれていて興味深い)レジュティッキーの先生がチエルニー、チエルニーの先生がベートーヴェン、私はそんなことを考えては、ああ、ベートーヴェンとつながっている、どこかで、等と思っては、ひとりよこんでいるのです。今年は、クロイツァー先生の生誕百年にあたります。亡くなられて三十有余年たった今も、こうして先生との思い出は私の胸に生きつづけています。

(1984・12月)